

氏名	香取 真理
学位名	博士（システム情報科学）
学位記番号	第64号
学位授与年月日	令和4年9月16日
学位論文題目	学習者指向の自律的英語スピーキングレッスンを支援するスパイラルモデルの実現
論文審査委員	主査 平田 圭二 副査 竹川 佳成 副査 寺井 あすか 副査 中小路 久美代

論文要旨

外国語教育を取り巻く ICT 環境は過去 60 年間大きく変化してきた。外国語教育は蓄音機から CSCLL (Computer-Supported Collaborative Language Learning) まで、その時代の新しい技術を取り入れて来た歴史がある。近年では、インターネットを介した YouTube の利用や、タブレット端末の配備、海外・遠隔地との学生同士の交流、市街地の本校と分校を結んだ遠隔授業、海外の講師とのオンライン英会話など、ICT の進化に伴い、これまで伝統的な対面授業が一般的だった外国語学習のクラス環境も、さらなる進化を遂げつつある。2020 年以降、COVID-19 によるパンデミックの広がりにより、この「遠隔」授業形態は急速に様々な場面に拡張されるようになった。対面での授業形態が一般的と考えられていた芸術や体育など、実践・実習を伴う授業の中でも「リモート」という言葉を用い応用されるようになり、外国語学習においても「リモート留学」という新しい留学形態が生まれることとなった。しかしながら、この様に急速に広がりを見せた現在の遠隔授業形態においては、有効性が高くかつ実装が容易で適用範囲の広い、自律的かつ持続可能な方法論の構築はまだみられていない。

本研究の目的は、学習者指向の自律的かつ持続可能な英語スピーキングレッスンを支援するスパイラルモデルをデザイン、実装し、その有効性を検証することである。本研究では「レッスン」という言葉を、一般的授業としての意味合いとして使用するのではなく、自立的持続可能かつサイクリックな場としての「レッスン」と捉える。

本論文の関連研究としては、遠隔教育、匿名性、非言語コミュニケーション、ゲーミフィケーション、自己調整型学習、CSCL (Computer-Supported Collaborative Learning) 等が

挙げられるが、本博士論文では、上記個々の分野の従来研究の知見を統合することで、より優位な遠隔教育支援の実現につながることを研究の意義としその新規性を述べる。

一定期間に特定の体験をすることで、一人一人が自律した学習法を自ら獲得して行く過程を分析する際、共通構造をもとめるのは困難と言える。そのため、本研究では、主にケーススタディーを中心とする質的分析方法を採用し、個別の文脈や状況に根ざした分析を行う。質的データの分析には、QDA(Qualitative Data Analysis)ソフトである MAXQDA 2020 を使用する。

また、本研究では、一部、一人称研究の方法論を採用する。一人称研究については第一章で詳しく述べることとする。本研究では、観察調査者がアバタを通しピア“peer”として観察に関与するという点において、また、観察調査の遂行においては、筆者のこれまでの体験に基づく記憶、あるいは理解が含まれるという点において一人称研究の性質を含むものである。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では本論文の背景、目的、構成について述べる。本研究が主に質的調査を採用する理由を述べ、本研究における「一人称研究」採用の根拠と立場について述べる。

第2章では、関連研究について説明し、本研究の位置付けと意義について検討する。本博士論文に関連する研究分野としては、遠隔教育、匿名性、非言語コミュニケーション、ゲーミフィケーション、自己調整型学習、CSCL等が挙げられる。本論文では、上記個々の分野の従来研究の知見を統合することで、より優位な遠隔教育支援の実現につながることを研究の意義とし、その新規性を述べる。

第3章では、本研究で行われた遠隔英語スピーキングクラスについて、その詳細を述べる。リモートスピーキングクラスの流れ、観察調査参加者やその内容について説明を加える。また、インストラクタとして使用したアバタとその非言語情報や特徴について説明する。更に、本観察調査で使用した、日本人学習者の学習経験に沿った、オリジナルの発話スコアリングシステムについて解説し、スコアリングシステムの中での単語や熟語の処理方法、レマ化等について述べる。また、アバタとのピア的振り返り“peer-regulation”と、クラス後の自己調整“self-regulation”の方法、内容などについて実例を挙げながら説明する。

第4章では、観察調査の結果について、定量的、定性的、両側面から示し、分析・考察を行う。定量的結果としては、クラス参加者の使用単語総数、使用単語種類、使用熟語数に関してそれぞれ増加が認められた。使用単語レベルとその平均値、最高値についても僅かながら上昇がみられた。また、TOEIC Speaking Test のスコアについて t 検定の結果、クラスの前と後では参加者のスコアに有意な差がみられた。

後半の質的分析では、毎回の「振り返りシート」から参加者の情動の変化や、英語学習に対するビリーフ“belief(s)”形成の可能性などを探った。「振り返りシート」の結果分析には、QDA(Qualitative Data Analysis)ソフトである MAXQDA 2020 を一部使用した。発話内容の実例から、参加者は遠隔英語スピーキング練習期間中、特に「単語」、「熟語」、「発音」を

意識しながら参加していたことが窺えた。また、振り返りシートからは、スピーキングクラス参加時に内在する「不安」が軽減され、参加への積極性と自信が読み取れた。クラス終盤には、自律型レッスンへの繋がりが予想される記述もみられるようになり、持続可能な自律学習の萌芽を予想させる結果が示された。

第5章では、本観察調査終了後に実施した記述式アンケート結果について分析し、考察を加えた。アンケート回答分析の結果、今回実施されたリモート英語スピーキングクラスは、参加者にとって、気づきと外国語学習に対する独自の方策を形成する過程に影響を与えていた。また、次回参加への動機付けを後押しする効果にも繋がったと予想された。

第6章では、第1章から第5章までを振り返り、観察調査の結果を再度確認しながら、自律的かつ持続可能なレッスンの構築について議論を加え、本論文の結論とした。

ICTを導入した遠隔英語スピーキングクラスへの参加は、参加者の英語スピーキング力を向上させ、参加者にコミュニケーション不安の軽減と、人前で話すことへの自信を与える結果となった。また、学習者が自分自身を理解し、外国語学習に対する気づきを得ることで、自分に適した学習方法を選択・応用し、目標を立てながら次のクラスに参加するというサイクルな「レッスン」の実現に向けての行動変容をもたらした。

最後に、他分野や遠隔教育全体への支援の実現や応用の可能性についてと学術分野の進展への寄与の可能性について述べ、今後の展望について概観した。

キーワード：遠隔英語スピーキング、遠隔教育、匿名性、非言語コミュニケーション、ゲーミフィケーション、自己調整型学習、CSCL

審査結果の要旨

本学位論文では、申請者のこれまでの英語教育現場での経験、留学担当教員としての知識や体験を活かして、遠隔英語スピーキングの学習者が、自らのペースで目標設定および達成をするような、自律したレッスンのサイクルをサポートするモデルを構築し、その有効性を検証した。2021年度実施した遠隔英語スピーキングクラスに採り入れた4つの特徴（自己調整型学習、ピア的サポート、分り易いフィードバック、インストラクタとしてのアバタ）が自律的かつ持続可能なレッスンの実現に貢献した仕組みを、観察調査、エスノメソドロジ的手法、質的データ分析によって明らかにした。

第1章では、本論文の背景として、申請者が2018年から毎年改善を続けてきた遠隔英語スピーキングクラスと、2021年に自律的かつ持続的なレッスンに到った経緯を説明した。本研究が主に質的調査を採用する理由と、本研究が一人称研究の方法論を採用した根拠と立場について述べた。

第2章では、本研究に関連する研究を紹介し比較し、本研究の位置付けと意義を明らかに

した。取り上げた関連研究分野は、遠隔教育、匿名性、非言語メディア情報、ゲーミフィケーション、自己調整型学習、CSGLであった。これら個々の分野における従来研究の知見を統合することで、より有用な遠隔英語学習支援の実現につながる可能性があることを指摘し、そこに本研究の新規性があると主張した。

第3章では、2021年に実施された遠隔英会話クラスについて、その計画、準備、実施、得られた分析データなどの詳細を述べた。まず、遠隔英会話クラスの大まかな流れ、インストラクタとなる観察調査者の役割、クラスの学習内容、インストラクタとして使用されたアバタとその非言語情報や特徴について説明した。観察調査で使用したオリジナルの発話スコアリングシステム中では、日本人学習者の学習経験に適應して単語や熟語が処理され、レマ化等が行われることを述べた。そして、事例を挙げながらアバタとのpeer-regulationと、クラス後のself-regulationの方法や内容などを説明した。最後に、本研究の一人称研究の側面を述べ、一人称研究的な方法論を採用した箇所を指摘した。

第4章では、観察調査の結果を定量的および定性的の両面から示し、分析と考察を加えた。定量的分析結果として、クラス参加者の使用単語総数、使用単語種類、使用熟語数の増加が認められた。使用単語レベルとその平均値、最高値についても僅かながら上昇がみられた。また、TOEIC Speakingテストのスコアについてt検定を行った結果、クラスの前と後では参加者のスコアに有意な向上がみられた。レッスン毎に実施された振り返りシートの質的分析には、QDA(Qualitative Data Analysis)ソフトであるMAXQDA 2020が使用された。分析結果として、参加者の情動の変化や英語学習に対するビリーフ形成の可能性などが示唆された。具体的な発話内容を元に、参加者は遠隔英語スピーキング練習期間中、特に単語、熟語、発音を意識しながら参加していたことが推測された。また、振り返りシートからは、スピーキングクラス参加時に内在する不安が軽減され、参加への積極性と自信が読み取れた。クラス終盤には、自律型レッスンを想起させる記述も見られるようになり、持続可能な自律学習の萌芽を示す結果が得られた。

第5章では、本観察調査終了後に実施した記述式アンケート回答結果を分析し考察を加えた。その結果、今回実施されたりモート英語スピーキングクラスは、参加者にとって、気づきと言語学習に対する独自の方策を形成する過程に影響を与えていたことが分かった。また、次回参加への動機付けを後押しする効果も現れていたことが示唆された。

このように、自己調整型学習、ピア的サポート、分り易いフィードバック、インストラクタとしてアバタ導入した遠隔英語スピーキングクラスへの参加は、次の4つの効果を生み出したことが、定量的かつ定性的に検証された：(1) 匿名的英会話クラスを好む学習者が非言語情報を組み込んだアバタとの遠隔スピーキングクラスを選好することは、学習者のコミュニケーション不安を軽減させ、人前で話すことへの自信を与えていた、(2) 発話内容を可視化し、評価及び点数化し、分り易いフィードバックを返したことが、学習継続の動機づけに繋がり、学習者に自分自身をモニタする機会を与え、学習に対する気持ちの変化、自分なりの学習方策形成の萌芽を促し、それが次レッスンへの学習動機づけに繋がっている。

た、(3) インストラクタとのピア的振り返りが学習者にとって有効だったため、学習者に必要な修正を自ら加える機会を提供することとなり、学習者自身が自分の学習に対する気づきを得られた。そしてその経験が学習意欲や次回への参加を促した、(4) クラス終了後の振り返りが学習者のクラス継続に効果的だったため、自分自身を理解し、自分に適した学習方法を選択して応用し、目標を立てながら次のクラスに参加するという行動変容を学習者にもたらした。

最後に、他分野や遠隔教育全体への支援の実現や応用の可能性についてと学術分野の進展への寄与の可能性について述べ、今後の展望を述べた。

以上、本学位論文で提案された内容は、学位授与に値するので、審査合格と判定する。